

頼政拳兵伝承の構造

——その軍語りをめぐって——

谷 口 広 之

(一)

平家物語において、橋合戦を中心とする頼政拳兵の章段群は、いわゆる「いくさがたり」を素材に形成されたものとして従来多くの論を持つ。たとえば谷宏氏は橋合戦で奮闘する五智院の但馬に与えられた矢切の但馬というあだ名に着目して「いかめ坊とか矢切りの但馬とかいうあだ名、およびそのあだ名が由来した事件を語る『語りもの』が平家成立の以前にすでにひろくゆきわたっていた」と想定し、「聴手たちの、自分がそのあだ名を熟知している佐慶や但馬の勲しをききたいという欲求とひびきあったがゆえに、平家作者があのような句を付帯した」として「平家成立の以前」の素材としてのいくさがたりの存在に注目した^①。また梶原正昭氏も、この橋合戦が多く三井寺の悪僧たちの活躍に負うところから「三井寺側の大衆

たちの内部か、またはそれにきわめて近い立場から生まれた合戦譚を母胎として形象化された」と推測し、足利又太郎忠綱による馬筏を組んでの宇治川渡河戦も武士たちの「戦いの具体的な知識に裏づけられた」「渡河戦の体験などから導き出された語り伝え」であり、「武士たちの世界で培われた『いくさばなし』や『いくさがたり』を想像」させるものが橋合戦の背景にあったと考えた^②。

このむしゃこうじみの氏^③以来の「いくさがたり」の概念については、先回考察を加え、益田勝実氏や水原一氏^④、服部幸造氏や生形貴重氏の論も含めて、それらがいずれも戦闘に参加した体験者のなかから生まれただものであるとする視点に疑問を提出しておいた。もちろんそれは、信太周氏のような、「いくさがたり等の存在は決して自明のことではない。口承の世界に属する事柄を文献で解明しようとすること自体無理があるのかもしれないが（中略）その

識別の重大さ、困難さを改めて感ぜずにはいられない^⑨という消極的、ストイックな理由からではない。あくまで、平家物語を含めて軍記や語りものに通底する伝承の基層に軍語りとしてのありようをみてとろうとする立場からのことである。

そこで従来の橋合戦の読みについて一例だけ検討を加える。益田勝実氏^⑩や難波喜造氏の読みは幾度となく検討の対象となつてきているで、ここでは山下宏明氏の論^⑪について考えてみたい。山下氏は初期増補系とされる四部本と「尾代本に近い古態を忠実に伝える小城本」との比較をもつて、橋合戦における筒井浄妙明秀や五智院但馬の奮戦ぶりの両本の違いをとりだそうとする。すなわち、四部本の「語り手はこのように対象に即しながらも、しかし対象になり切る事はなく、一貫して、とやうのが言い過ぎなら、おおむね対象から離れた外側にある。対象の外側であつてその現場を見るといふ姿勢を保っている」として「これは橋合戦の現場を具さに見たか、あるいはそれに近い姿勢をとつた者の見聞報告であるに違いない。そのなまの見聞としての立場で語つたものであろう」とする。これに対して「語り系では、一方的な報告ではなく、聴き手への効果を意識して一層具体的に語り、聴き手のその語りの対象の中への参加を求める積極的にひきずり込むといふ姿勢が顕著で」あつて「時には自らが対象になり切つてその場面を再現して語る」という相違があ

るとするのである。

ここでなによりも問題なのは「庶民への語りかけを更に積極的にする所の語りの方法」と氏がいうとき、発生のレヴェルにおける語りと「擬声語や擬態語をも利用して一層直接感覚的に訴え、その場の具体的な再生を行なう」語りとの間にはきわめて大きな隔りがあるということである。したがつて「合戦談も、いくさの見聞記の類」なども氏にあつては、しょせん素材のレヴェルを超えることはない。いったい平家物語においてその「古態性」を追求することが、平家物語のなにを明らかにすることになるのであろうか。旧来の「古態論」は、諸本の先後関係をさぐり、より「原態」に近い平家物語の姿を結像させようとして、素材とのかかわりや「史実」との距離といった視点からこれを追い求めてきた。素材本来のかたちをどれだけ残しているか、あるいは史実にどれだけ近いかがその指標とされてきた。しかし素材と作品という二元論、伝承と作品（テキスト）という二元的枠組みに平家物語テキストを分断してその平行線を無限にたどりつづけることは無意味であり無効である。まして史実と虚構といった観点から導き出される作為やデフォルメにおいて平家物語テキストの生成のダイナミズムが明らかにされることはありえない。平家物語を伝承のテキストとしてとらえるとき、そこには基層から表層へと幾重にも織りなされたテキストそれ自身の構

造がみえてくるはずである。

だから、諸本テキストの異同を明らかにすることは、相互の先後関係や古態性を解き明かすための方法ではない。それは、平家物語がどのような伝承の配列として成りたち、どのような伝承の重層として成りたっているかをさぐる方法的手続きでなければならない。

伝承を素材のレヴェルでしかみようとしない誤りは、たとえば生形貴重氏のように「(平家)物語の伝承論的な基層構造を考察してみよう」と標榜しながら、結局のところ「龍神に仕えた呪的な職能民がすぐれた芸術的主体性を獲得して」^⑩いったというような一通りの結論を導き出すだけでしかない。

本稿では、諸本テキストの表層から下降して頼政拳兵の伝承を成立せしめている基層に迫ること、あるいはその表層を剝離して平家物語テキストにおける頼政拳兵伝承の軍語りとしての基層を解明することを目的とする。そこで山下氏にならって四部本と小城本とをテキストとして比較してみる。

〈四部本〉

脱^{ヌケ}鞆^{ツツ}捨^{スツ}弓^{ユミ}却^{シカシ}不^フ劔^{ケン}鞆^{ツツ}一^{ヒト}飛^{トビ}上^ノ橋^{ハシ}桁^ノ上^ノ二^ニ橋^{ハシ}桁^ノ僅^ハ四^ニ五^ノ寸^シ許^ク二^ニ条^ニ大^{オホ}路^{ミチ}如^ニ三^ニ重^{カサ}部^ノ行^ク不^フ滞^ト走^{ハシ}廻^マ投^マ逸^ハ散^ル一^{ヒト}劔^{ケン}折^レ是^ハ河^{カハ}投^ヘ入^ル拔^キ太^タ刀^ヤ戰^マ太^タ刀^ヤ四^ニ五^ノ人^{ヒト}許^ク討^ツ執^ル八^{ハチ}方^{ハチ}役^{ヤク}程^ハ不^レ堪^ハ二^ニ太^タ刀^ヤ自^レ中^ノ折^レ是^ハ河^{カハ}投^ヘ入^ル拔^キ腰^ヲ小^コ刀^ヤ

頼政拳兵伝承の構造

走^リ廻^ル偏^ヘ只^ニ見^ル二^ニ苑^ニ

〈小城本〉

ツラヌキ脱^{ヌケ}ハダシニナリ長刀ノ鞆^{ツツ}ヲハヅイテ橋ノ行^{ユキ}柁^サヲサラノト走^リ渡^ルル人ハ恐^レテ渡^ラネ共^ニ淨^ニ妨^ガ房^ノガ心ニハ一条二条ノ大^{オホ}路^{ミチ}トコソ振^テ舞^イケレ長刀ニテ向^キフ敵^ヲ五人^{ヒト}雜^ヤ伏^セ六人ニ当^ルル刃^ニ長刀ノ柄^ノ打^ツ折^ツテ捨^テゲリ其^ノ後^ニ大^{オホ}刀^ヲ拔^キヒテ切^キケルガ三人^{ヒト}切^キ伏^セ四人ニ当^ルル度^ニニアマリニ甲^ノノ鉢^ノ強^ク打^ツアテ目^ヲ貫^キノ本^ノヨリチヤウドヲレ河ヘザブト入^ル今^ノハ所^ノ憑^ル腰^ノ刀ニテ偏^ニ死^ニナント狂^ケリ

兩本文の比較において、山下氏が考えるように、四部本のような説明的な本文が小城本のような本文に流動、展開していくことがはたして可能であろうか。むしろ山下氏のいう具体性直接性が省筆されていく略体性において四部本のような本文が成りたつていくと考えることの妥当性の方が強いと思われるのである。まして表現上のディテールの相違をもってそれをただちに語り手の問題に帰着せしめるのにはかなりの無理がある。むしろ注目すべきは、語り系テキストにはない四部本固有の箇所、つまり右の引用文の直前にあたる

一番^{ヒト}上^ニ給^フ守^ル忠^ニ清^ヲ爲^シ大^ニ将^ヲ軍^ト五十^ノ余人^{ヒト}渡^リ被^シ射^レ落^ル十七^ノ人^{ヒト}殘^リ引^リ退^ク二^ニ番^ニ飛^ハ彈^ヲ守^ル景^ノ家^ノ六十^ノ余人^{ヒト}渡^リ被^シ射^レ落^ル廿^ノ三人^{ヒト}是^レ殘^リ引^リ退^ク三^ニ番^ニ信^ハ濃^ニ国^ノ住^ル人^{ヒト}吉^ノ田^ノ八^ノ郎^ノ馬^ノ允^ノ常^ノ葉^ノ江^ノ三^ノ郎^ノ爲^シ大^ニ将^ヲ軍^ト三十^ノ余人^{ヒト}渡^リ被^シ落^ル

射廿余人是残引退江三郎被射落八郎馬允被射左眼引退四番河内守康綱三十余人渡射九人引退五番飛彈判官景高上総太郎判官忠綱為兩大將軍百余人渡宮御方

のような部分であろう。末尾の欠字が「二」であるならば他の軍勢と合わせて、『玉葉』や『山槐記』に記されている頼政追討軍の総勢にはほぼ一致するのであるが、それはともかく、軍陣への武士たちの着到の記録を思わせるようなこの本文は、戦況や戦果の報告に類するような内容で、後続する悪僧たちの奮戦ぶりとの間には明らかに落差がある。というよりもそこに四部本独自の編集の問題がひそんでいるに違いない。

ともあれこのようにして、いくさばなしにせよいくさがたりにせよ、あるいは見聞報告にせよ、それらはいずれも「平家物語合戦譚」の素材あるいは母胎と考えられてきたわけで、軍語りの伝承としてのありようがテキストそのもののありようとして問われてきたことはほとんどなかったのである。

(一)

そこで橋合戦のテキストとしての構造を諸本の異同を通じて明らかにしてみた。少なくとも橋合戦に関して諸本に共通することが

らは次のような点である。

三井寺を出、南都へ向う以仁王、頼政は度重なる宮の落馬によって暫時平等院に休息する。そこへ追討軍として派遣された知盛以下の軍勢と宇治川をはさんで対峙する。頼政方の手勢として活躍するのは筒井淨妙、一來法師、矢切の但馬などの悪僧たち、そして頼政配下の渡辺党である。頼政勢の強い抵抗にあって戦況は膠着するが、足利又太郎忠綱の勇壯な渡河によって突破口が開かれ、これまでと観念した頼政以下は次々と討死あるいは自害していく。その間隙に以仁王はわずかの供を連れて南都へ向うが、途中、平家勢に追いつかれあえなく最期を遂げる。これが諸本に共通する橋合戦のおおよそである。それでは平家物語は、これらを展開の基軸として、そこにさまざまな「説話」を吸収しながら次第に成長し、改変が行なわれ、現行の諸本としてそれぞれに定位していったのであろうか。それを跡づけることは困難であるし、諸本の相互関係としてのみとらえてしまうと、平家物語テキストの生成のありようを明らかにすることができない。

そこで橋合戦を頼政の拳兵、および敗北の伝承としてとらえるとき、表層としての諸本テキストの基層に、この橋合戦の伝承としてのモデルを仮構することができる。それは次のような様式性において成りたっている。

Aa 源三位入道は、薄墨染の長絹直垂に品革威の鎧を着、今日

を限りとや思けん、態と甲は不着けり

a2 嫡子伊豆守仲綱は、赤地錦直垂に、黒糸威の鎧着けり。是

も甲は不着けり

a3 舍弟源大夫判官兼綱は、萌黄の生絹直垂に、緋威の鎧着て、

白星の甲に蘆毛の馬にぞ乗たりける

Bb1 三位入道も統いて落行けり

b3 源大夫判官は、今は叶はじと思て鞭をあげて落行けり

Cc1 入道の首をば下河部藤三郎取て

c2 弥太郎盛兼其頸(仲綱)を搔落して

c3 兼綱いかにも難遁見えければ、省主の首を搔落し

ここでは頼政父子のいでたち、敗走、自害がそれぞれに三回反復によつて織りなされているのであり、本来ありえたはずの伝承をこのような三層法によるものとしてとらえることができる。

もちろんこれらは諸本間において一様ではない。頼政の自害については諸本に共通するところであるが、兼綱の死は四部本、長門本、覚一本では討死であり、これを自害とするのは延慶本と盛衰記である。いったいに軍語りを伝承として可変的なものと不変的なものとに分けて考えるとき、討たれるものの名、あるいは存在は不変的で

あるのに対して、それを討つもの、あるいは討たれるものに随伴する従者たちの名(存在)は可変的であるという関係を看取することができる。たとえば、兼綱の場合、討死か自害かという相違はともかく、兼綱の死それ自体については変わるところがない。それに対し兼綱の頸を討つのは、延慶本では景高の郎等、長門本では忠綱の郎等であり、盛衰記では敵に取られまいとする従者省がこれを討つのであって、覚一本ではただ討死をいうだけで討手については触れようとなし、というようにそれらは特定されておらず、きわめて可変的である。それははたしてなぜか。死が動かしがたい事実であるからだろうか。おそらくそれは、軍語りにあつてはその伝承の核となる鍵言葉^⑮が固有名詞としての名であるからであろう。それに対して討ちとったり随伴したりするものの名が可変的であるのは、それぞれの伝承の生の座にかかわつて討手や随伴者の名が置き換えられているからであると考えることができる。

このような武将の死についての伝承には二つの位相が認められる。たとえば兼綱の死は延慶本や長門本では景高郎等や忠綱郎等の武勲であるが、盛衰記においては頼死の兼綱の頸を取るのに従者省であり、また仲綱は長門本では従者盛兼に頸を取らせるが、他本においては敵景高がこれを討っている。すなわち二つの位相とは、討取った側からの伝承である場合と討ちとられた側からのものである場合

a2 日胤はなお敵の中へ走り入て、敵六人うちとりて討死す

a3 伊賀房は八人切伏せて、四人に手を負せて、奈良の方へそ落ける。

というような長門本のありように、頼政自害の伝承と同じく三回反復の形式をみる事ができる。

そこで、このような三層法の様式が軍語りにおいてなにを担うものであるのかが問題になる。基本的には、それはベルソナの転換、トポスの移行を実現する伝承の仕掛けである。すなわち、ヒトがモノと化し、此岸から彼岸へと移行する転換を伝承のうちに仕掛けるものとして三層法の様式をとらえることができる。そのことは、たとえば日本霊異記における隠身の聖の説話、また補陀落渡海伝承、あるいは民間伝承としての大師伝承などによって例証することができるが、詳述する余裕がないので指摘するにとどめ稿を改める。

ところで以仁王に最期まで随伴した伊賀房は「奈良の方へ」落ちていくのであるが、「南都の方へそ罷りける」、「三井寺の方へそ落ける」として戦場を離れ虎口を脱していくものたちが橋合戦には少なくない。その多くは三井寺や南都の悪僧たちであるが、「罷りける」「落行ける」という類型的表現は、実は頼政拳兵伝承の基層に悪僧たちの伝承が織りなされていく際の決まり文句である^⑥とみる事ができる。たとえば延慶本において

○宮の御方より筒井の淨妙明波褐鍔直垂に火威の鎧着て

高念仏申して南都の方へそ罷りける

○圓満院の大輔慶秀矢切の但馬明禪と云者あり

寺の方に見参せむと申てしつゝと三井寺の方へそ落にける

○宮の御方に法輪院の荒土佐鏡變と云者あり

というように、悪僧たちの登場と退場は一定の類型性を有していて、頼政拳兵伝承に織りなされていく悪僧たちの伝承が重層していく形をうかがわせている。これらのなかで筒井淨妙明秀（明俊、明春）の奮戦と南都落は現行テクストに共通するものであるが、長門本は「かなふべしとも覚えず」、盛衰記は「始終はかばかしからず」として、南都落する明秀の内面をのぞかせている。他本は明秀の南都落の事実をいうのみであるが、おそらく長門本、盛衰記は「罷りける」「落行ける」という決まり文句から明秀の内面に転じて、その心情説明、理由説明、すなわち合理化を派生させていったのではないだろうか。

悪僧たちの伝承が頼政拳兵伝承に重層していくときの決まり文句についてさらにもう一例検討を加えたい。それはかつて谷安氏によって平家物語以前の「かたりもの」（いくさがたり）の存在を示す証左として指摘された「それよりしてこそ矢切の但馬とはいはれけれ」の句である。覚一本他、多くの諸本がこの句を有し、四部本も

「自其異名云矢切但馬」と同類の本文をもっているが、延慶本は明禅長刀をふりあげ水車をまわしければ矢長刀にたゞかれて四方にちる、春の野に東方の飛ちりたるに不異、御方も興に入てそほめのゞしりける

として「それよりしてこそ」以下の句がない。盛衰記は

敵も御方も皆興に入て、ほめぬものこそなかりけれ

さてこそ矢切の但馬とも申けれ

として延慶本と覚一本他との両句を有している。「それよりしてこそ」の句は、谷宏氏もいうように覚一本巻二「一行阿闍梨之沙汰」における阿闍梨祐慶の「それよりしてこそ祐慶はいか目房とはいはれけれ」の句と重なってくるし、「ほめぬものこそなかりけり」の句も、同じく橋合戦での一來法師に与えられる称辞として延慶本にも盛衰記にもみることができ、という点において両句ともにそれぞれのテキストにおける決まり文句と認めることができるだろう。盛衰記はそれらを併せて編集しているのであるが、問題は双方の決まり文句の相違をどのように考えることができるかにある。たとえば延慶本は最初から但馬を矢切の但馬としてしまっているし、盛衰記は双方の決まり文句をもつものの矢切の但馬として最初から紹介してしまっている点で延慶本と同じである。これに対して覚一本では、五智院の但馬としての奮戦を述べた後に「それよりしてこそ」

とその名の由来に及ぶのであるが、ある意味では、悪僧たちの伝承は彼らの異名を語る伝承であると考えることができる。但馬と同じように「それよりしてこそ」とその名を語られるいかめ坊祐慶が但馬と同じ悪僧であることはたんなる偶然の一致であろうか。延慶本と盛衰記にだけみえる伝承であるが、その大声をもって平家の軍勢を嘲笑する荒土佐鏡饒も「異名には雷坊とそ申ける(延慶本)」悪僧である。いうまでもなくこのような矢切の但馬や雷坊という名が最初から存在したわけではない。橋合戦における奮戦が彼らに名を与えるのである。つまり彼らの名、および存在は伝承によって保証されているものなのである。それはちょうど伝説の構造と同じで、いわゆる伝説における石や樹木はそれらが物として存在するから伝説を成り立たせているのではなく、その石や樹木のいわれを説く伝承言語によって物としての存在を保証されているのであって、同様に平家物語テキストにおける合戦は伝承言語としての軍語りによってはじめて合戦たりえているのである。だから、「それよりしてこそ」の決まり文句は、異名を語る伝承としての悪僧たちの伝承が本来どのようにして成りたった伝承であるかを如実に示しているのである。このようにして頼政拳兵伝承は、頼政一党の最期を基層としてそこに悪僧たちの伝承や渡河戦の伝承を織りこみながら成り立っている重層的な伝承であるとその構造をつかむことができるのである。

(三)

頼政拳兵伝承の重層性を解きあかそうとすると、さらに二つの事柄について言及する必要がある。その一つは、頼政が平氏に対して謀叛をおこした原因として語られる宗盛と仲綱の馬争いをどのようにとらえるかという問題である。宗盛が仲綱秘蔵の馬を乞い、仲綱がこれに快く応じなかったために宗盛から恥辱をうけ、これを怨みに思った頼政仲綱父子が以仁王を語らって謀叛をおこしたとされるこの馬争いには、物語の本筋から逸脱した付加的傍系的説話であるとか、「平家作者」の歴史的視野の狭さを示すものであるとか、あるいは逆に、このように説話が関連づけられていくことによって物語が構想されていくのだというような見方や評価が従来与えられてきた。しかし現行のテキストに共通するこの馬争いをたんに付加的として退けることはできないし、また、「作者」の営為にこれを帰着させてしまうならば、頼政拳兵伝承において馬争いをもつ意味を明らかにすることはできない。重要なのは、頼政の拳兵が怨恨において語り出されるということである。それは直接には宗盛に対する私怨として出発し平家一門に対する怨恨となるが、その怨みは果たされることなく逆に無念の死を遂げることによってさらにその怨恨は増幅される。そこに頼政一党の死がモノの語り に化していく伝

頼政拳兵伝承の構造

承の契機があるといえるだろう。すなわちモノの成立とそれへの鎮撫という軍語りの基本的構造がここにある。

だとすれば、これも平家物語において付加説話、後日談として扱われている頼政の鵓退治、いわゆる鵓説話は、実は、頼政拳兵伝承においてこの馬争いと対極的な対をなしているのではないかと考えることができる。すなわち馬争いが頼政の怨を語り出すものであるとすれば、鵓説話は頼政の歌徳、武徳を讃えることによってモノとしての頼政を鎮める伝承上の役割を担っているのである。もちろん鵓説話は平家物語テキスト固有の伝承ではない。『十訓抄』などの中世説話集にも同様の伝承を収めるが、平家物語テキストにおける鵓退治は鵓という怪鳥の怪異において伝承性を有するのではなく、あくまで頼政の称揚にその意味がある。一見付加的とも見えるこれら馬争いと鵓退治は、このようにして軍語りの基本的構造においてとらえなおすべきであろう。

次に注目したいのは以仁王の乳兄弟として常に近侍していた左大夫宗信の存在である。語り系では宗信は宮の最期を池の中で隠れてみていた卑怯未練の男として指弾されているが、増補系においては宮の御所出奔から最期まで随伴した、その意味で宮の始終を見聞した人物であり、後日にその悔恨を語る人物である。水原一氏はこれを「宗信の懺悔談から発した話題だった」とし「語り物系の多くは宗

信を『憎まぬものこそなかりけれ』と批判し、懺悔談の痕跡を払拭していく^⑭として宗信という語り手を想定している。兵藤裕己氏は物語における告白形式は、語り手イコール主人公による罪と贖罪、穢れと浄化の定型を典型的にふまえたものとして、それは中世のざんげ物語以前から行なわれた物語の形式だったろう。「日本霊異記」以下の平安時代の説話集にみえる法師や尼の破戒説話にしても、破戒の罪を告白、ざんげする物語が、下層の唱導者によって既に語られていた。

とするが、問題は、宗信や宗信を称する語り手が実態として存在したかどうかではなく、平家物語テキストにおける懺悔の物語りがどのような位相を有しているかという点にある。基本的には懺悔は救済の物語りである。そのことを方位性において示せば、敗者が懺悔することによって救済されるという循環的な構造としてとらえることができる。もちろん敗者とは総括的な名称であり、物語のコンテクストにおいては裏切り者であったり戦場離脱者であったりするが、それらは俗世における罪障を負ったり自覚したりする点でおしなべて敗者とみることができるといえる。このような懺悔の物語りの循環的構造は、実は、敗者がモノと化しモノ語られることによって鎮撫されるという方位性および位相において軍語りの構造とまったく相同的である。だから、軍語りとしての頼政拳兵伝承の中に宗信の懺悔の物

語りが入れ子として組みこまれる構造的根拠が存在するのである。したがって当然、次のような見方とは懺悔の物語り、軍語りについてのパースペクティヴを異にする。

「平家物語」を構成する個々の合戦譚にしても、その多くは念仏聖のざんげ物語りに取材している。治承・寿永の乱後に高野山に入った武士として敦盛を討った熊谷直実（運生）、宇治川先陣の佐々木高綱（了智）はとくに著名だが、かれらの合戦物語は、聖の発心由来譚、ざんげ譚として、高野山内だけでなく、廻国遊行の高野聖の唱導にも利用されたろう^⑮。

戦場を離脱しあるいは武士を捨てた人々が唱導集団のなかに参加していったから「いくさがたり」も「懺悔談」も揮然となつて管理されていたとみるのはテキスト外の論理である。あくまで問題はテキストの有する伝承のありようとして問われなくてはならないであろう。

このようにして頼政拳兵の軍語りは平家物語テキストの入れ子であり、宗信の懺悔の物語りは頼政拳兵の軍語りの入れ子であるという関係を把握することができる。それはこの場合にかぎらず平家物語テキストの基本的な構造である。だからこそ、さまざまに「平家」が織りなされて「大平家」、すなわち平家物語テキストが構成されるというパースペクティヴに立つことができる。平家物語が

伝承のテキストであるということの根拠がここにあるといえるだろう。

- ① 谷宏「平家物語の形成と本質」『日本文学の遺産』。
- ② 梶原正昭「平家物語の一考察―『橋合戦』をめぐる史実と文学」『軍記物とその周辺』二六四、二六九頁。
- ③ むしゃこうじみのる「いくさがたりについて」『日本文学』昭和三十年一月号。
- ④ 拙稿「軍語りの様式と構造」『日本文学』昭和六十年四月号。
- ⑤ 益田勝実「語りもの文芸の社会性」『国文学』昭和三十五年六月号。
- ⑥ 水原一「軍記物と説話文学」『日本の説話』4。
- ⑦ 服部幸造「軍語り」と平家物語―「の谷合戦をめぐる」『日本文学』昭和五十七年二月号。
- ⑧ 生形貴重「平家物語合戦譚考―頼朝拳兵譚・一の谷合戦・延慶本寛一本をめぐる」『同志社国文学』十三号。
- ⑨ 信太周「いくさがたりと平家物語―古事談の記事検討を中心に―」『説話文学論集』一四八頁。
- ⑩ 益田勝実「平家物語・橋合戦」『日本文学』昭和三十一年七月号。
- ⑪ 難波晋造「えびらに一つぞ残つたる―『平家物語』橋合戦のリアリズム―」『日本文学』昭和五十二年六月号。
- ⑫ 山下宏明「平家物語研究序説」四七六～四七八頁。
- ⑬ 生形貴重『平家物語の基層と構造』七、二三頁。
- ⑭ 廣川勝美『ものがたり研究序説 伝承史的方法』。
- ⑮ 同右。
- ⑯ 同右。
- ⑰ 水原一『新潮古典集成 平家物語 上』三六〇頁。

頼政拳兵伝承の構造

- ⑱ 兵藤裕巳「物語 触穢と浄化の回路」『物語・差別・天皇制』二〇一頁。
- ⑲ 同右、二〇〇頁。